



エコツアーを始めるためのガイドブック：

中国雲南白馬雪山国家自然保護区への提案

日中市民社会ネットワーク 編集

一般社団法人アクトビヨンドトラスト 助成



目次

前書き

白馬雪山エコツアー発展の道に思いをはせる
李静若

エコツアーを始めるために：白馬雪山の場合
広瀬敏通 小原比呂志 森美文

白馬振り返る
王国慧

終わりに

前書き

このブックガイドは、2011年にスタートされた環境交流事業「自然共生型社会の実現に向けて——東アジアの交流ネットワーク形成」から生まれたものです。事業の目的は、自然共生型社会の実現に向けて、自然環境と地域文化の体験・学習に関わる東アジアのキーパーソンをつなげ、理論と経験と知恵を共有していくための交流・研修の仕組みを創出することです。

プロジェクト実施の背景として、一つは、日本では自然環境と人間生活との調和をめざす自然共生型の価値観とライフスタイルが提示されて久しく、具体的な知恵や技術、経験、政策、制度的枠組みなどが蓄積されてきたが、いまなお社会を動かす中核的指針（コアバリュー）になっているとは言えません。一方、中国では急速な経済発展と環境破壊にともなって、地球温暖化に対する問題意識が一部の人々の間で広がっており、彼らはメディアや専門性、組織的な力で社会一般に対して強い影響を及ぼしつつも、自然共生型の社会を実現するための効果的なコンセプトや方法論を探し求めている段階にあります。「社会一般にも浸透しやすく、インパクトのある自然共生型のライフスタイルを、いかに提示し、実践できるか」について課題を共有し、東アジアという地域的な広がりの中で持続可能な市民社会形成に向けた交流と研鑽を深めていきたいというのはこの事業の初心です。

ちょうど事業が発足した直前に、日本社会に大きく揺らした東日本大震災が発生し、端的に自然の力の前で人間が築き上げた現代文明とそのシステムの脆弱さを物語りました。福島第一原子力発電所の一連の危機的状況は、高いエネルギー消費によって支えられた便利で快適な生活がいかに壊れやすいかを知らしめ、いわゆる先端的な科学技術の限界を露わにしました。自然共生型社会のコンセプトには、「自然を深く知り、自然に敬意と畏怖を抱くこと、自然を支配・制御するのではなく、自然に寄り添ってその恵みを活かすこと、“共生”の実現につながる価値観とライフスタイルを確立すること、科学技術で固められた現代生活に潜む限界を自覚すること」などが含まれます。自然環境や地域文化の学習と体験に軸足を置くいわゆるエコツーリズムも、本来こうした自然共生型社会の理念にもとづくものだが、世界を震撼させた311大震災と原発事故をきっかけに、自然共生型社会への理解と実践を促す役割が求められていました。

2011年から2014までの三年間、エコツーリズムを長年模索してきた屋久島を最初の足がかりに、日中両国で自然と人間の文化とのつながりを見直そうとする活動の実践者・関係者が情報を共有し、顔の見える交流を行い、東アジアにふさわしい「自然共生型社会」の実現を支え合う地域づくりのネットワークも少しずつですが、形が見えるようになりました。

このガイドブックを作成しているいまは、ちょうど日本の中でも、エコツーリズムに関する新しい動きが始められて、国際認証を取り入れて、地域活性化と持続可能な社会づくりに重点を置くなど、今までの活動を見直そうとしています。一方、中国にも、急速な経済発展がもたらした環境問題と貧富の格差など社会問題を解決するひとつの方法として、エコツーリズムに注目し、試行錯誤しながら各地で実践しています。この薄い一冊のブックガイドは、三年間の相互訪問と交流にかかわってくれた日中双方の関係者たちの労力と知恵が含まれる、共同作業の結晶で、微力ながら、いま中国と日本で頑張っている人たちへの応援になることを心からねがっています。

一見白馬雪山保護区のために書いたこのガイドブックは、基本となるコアバリューは、普遍性をもつものと信じて、ぜひ他の地域、さらに他の分野にもご参考いただけたらと思います。いろいろな方にご覧いただいて、感想をご共有し、いただきたいと思います。

このガイドブックをきっかけに、持続可能な社会を実現するための方法としてのづくりエコツーリズムにご興味を持っていただければ幸いです。

白馬雪山におけるエコツアーの試み

李静若

私は、2010年末にWinrock¹の「澤仁」プロジェクト（経済成長によるチベットの環境資源の持続可能化プロジェクト）に参加したが、ほぼ同じ時期に初めて白馬雪山を訪れた。そしてすぐに、白馬雪山の美しく独特な自然と、純朴で愛すべき人たちに引きつけられてしまった。

白馬雪山自然保護区は、横断山脈の山腹にある。金沙江（長江）、瀾滄江（メコン川）、怒江（サルウィン川）の3つの川が平行に流れ、互いに最も近



寄る、直線距離にしてわずか74kmのエリアが、まさにこの保護区内にある。標高5,640mの扎拉雀尼峰（ジョラジョニ峰）から、標高2,080mの霞若郷まで、40km足らずの距離の間に3,480mもの高度差がある。このエリア内には、「乾熱河谷」（hot-dry valley）の低密度の低木草原帯（sparse shrub slope zone）、雲南松、

高山松林帯、針広混合樹林帯、亜高山常緑針葉樹林帯、高山低木群落・草原帯、高山がれき場寒冷砂漠帯、高山・氷雪帯など、7つの植生の立体垂直分布気候帯（three-dimensional vertical climate belt）が見られる。これは、中国全土の南北数千キロの範囲でみられる植物の水平分布に相当する。ここは世界が注目する低緯度高海拔生物種の遺伝子の宝庫であり、比較的完全な状態を保っている「自然総合体」（natural complex）でもある。

しかし、注目に値するのは、中国の大きな発展と大きな消耗、そしてあらゆる物が資源として利用されてしまうという背景のもとでも、白馬雪山の景観や動植物は、比較的完全な状態で保全されている。これは、（白馬雪山が）辺りで遠いところにあること、交通アクセスが悪いという要因以外に、この土地で生活をしている人々がこの美しい自然を守ってくれているからだ、私は信じていたい。自然の美しさは容易に目にすることができ、賛嘆される一方で、人々の

¹ アメリカに本部がある国際 NGO

行為や生活スタイル、その奥に潜む文化（宗教、信仰）、そしてこれらと自然の間の関係は、なかなか目にすることができない。そのため、すべての自然遺産は、そこがまだ人が住む場所でさえあれば、同時に文化遺産でもあるべきだろうと私は考えている。伝統文化は、間違いなく自然保護の土台である。実際、チベット族居住地域の多くはどこも、客観的にみてこの条件を備えている。しかし、どのようにすれば、これらの価値と、現地の人々と自然の調和のとれた共生の理念を首尾よく保存し、発信していけるのだろうか。これは、私たちが考えなければならない問題だ。

その後、保護区管理局の職員と交流をするなかで、私たちは、白馬雪山保護区は「三江併流世界自然遺産」エリア内で誕生した最初期の国家級自然保護区であることを知った。保護区は、30年にわたって生態保護の経験と保護分野における数多くの専門人材を蓄積してきた。同時に、保護区はコミュニティの発展をも重視しており、多くの組織と協力して様々なコミュニティと共同で地域づくりを展開し、発展と同時に生物多様性の保護と伝統文化の保護の両立を模索してきた。このプロセスのなかで、保護区管理局は、生態保護と地方の持続可能な発展に関する管理のイノベーションも図ろうとしている。そのうち、エコツアーは彼らが早くから模索してきたひとつの方法である。



管理局は、2006年に曲宗貢でエコツアー参加者が宿泊するためのキャンプ場を設立し、木道を設置した。そして、2007年には、「シャングリラ旅行社」と共同でエコツアーのマーケティングと宣伝を開始し、保護区内の4つの関係する村と村民とのコンセンサスを得た。そして、既存の牧場は拡大しないことを決

め、旅行者のもてなしと馬子（馬をひいて人や荷物を運ぶ仕事をする人）に関する訓練を実施し、段階を踏み規範のあるかたちで、白馬雪山でのエコツアーを推進しようとした。しかし、2007年以降、保護区が雲南金絲猴国家公園の建設計画を実施したため、エコツアープロジェクトは一時的に中止に追い込まれてしまった。それから2010年6月になってようやく再びプロジェクトが始動し、もともとあるインフラ設備の状態回復と改良をはじめた。ここから見て取

れるように、保護区はエコツアープロジェクトの開発に対し、常に、「着実にしっかりと」「量より質を」との原則を貫いてきた。このような真面目で慎重な態度は、今日では高く評価されるべきものだろう。

事前に行った視察と交流から、私たちは、白馬雪山のエコツアー推進のサポートは価値あること、意義あることだと思っている。まず保護区の観点からいうと、中国では、保護区の業務を評価にあたって鍵となる3つの指標はそれぞれ、地域の共同管理、資源の保護、市民への環境教育である。市民向けに行う環境教育は、保護区の責任と義務でもあり、保護区が影響力を拡大しさらなる発展をするために必要な取り組みであるとも言えるだろう。このほか、管理サイドと政策決定者としての保護区管理局は、白馬雪山のエリア内の様々な開発活動に対して、直接管理をする権限とハイレベルの政策決定権を有している。これは、エコツアープロジェクトの開発と運営の集中的な管理と持続可能性の原則を徹底し、保持するのに役立つ。次にコミュニティの観点からいうと、エコツアーへの参画は、保護活動を通じて補償を得ることができ、エコツアーを通じてお金を稼ぐことができることを意味する。つまりこれは、新しいオルタナティブな生計手段なのだ。エコツアー自体の観点からいうと、これはひとつの商品というよりむしろ、提唱に値する旅行のスタイル、または原則だろう。この原則のもとで進められた旅行は、地域（経済と文化）を活性化し、地域と文化を超えた交流を促進することができる。また、これによって地域が自分たちの自然や文化、生活の価値を認識することができる。そして、これが世間の人々の目にも留まり、気づいてもらうとともに、これらの価値をともに大事にすることもできる。これは、保護活動にとっても地域の発展にとっても、一種の好循環を生み出すのに役立つと考えている。

このため、2011年初頭には、Winrockと白馬雪山自然保護区は、エコツアーをベースとしたコミュニティ参画型の自然資源保護の協力プロジェクトを開始した。約1年半という時間のなかで、私たちは自然遺産登録地のエコツアーをテーマとして、スタッフに対する研修や、専門家による白馬雪山カール地形の視察、当該エリアにおけるエコツアーの要素分析、またエコツアープロジェクトの初期設計を行ってきた。

2010年から、エコツアープロジェクトを復活させると決めて以来、保護区はすでにあるキャンプ場とエコツアー用の木道をベースとして、エコツアー関連のインフラ設備の建設をさらに強化し、入山場所の沿道にある展望台の修築、キャンプで利用する水の問題の解消、太陽エネルギー利用設備の設置、小型水力発

電設備の設置のほか、野菜温室を建てるとともに、白馬キジの野性復帰まで試みた。これら既にある試みから見ると、保護区のエコツアー開発はやはり小規模建設や現地での材料調達、巧妙なデザインなどの理念に基づいて行われている。これは原則的に、今後破壊の減少と持続可能性を保障している。現在、白馬雪山自



体の優れた自然や文化、保護区と地域の良好な関係および整ったハードインフラは、すでにエコツアーの発展の確かな基礎となっている。次は、自然学校に対する理解と合意、そして白馬雪山の自然体験活動のフイージビリティに対する日本の自然学校やエコツアーガイドの専門人材の承認に基づき、白馬雪山自然保護区は、エコツ

アーをメインコンテンツとした自然学校の建設を保護区の環境教育と持続可能な観光の発展目標として定めた。

中国社会全体と同様、中国の観光業も、今まさに持続可能性の理念への転換の途上にある。「エコツアー」という言葉が広く濫用されているときに最も必要となるのは、理論もしくは紙上での反駁や反撃ではなく、実践により得られた真の意味でのエコツアーのひとつの成功事例によって「エコツアー」の名分をたやすことだ。願わくは、白馬雪山がこの重責を担い、中国のエコツアーと自然学校のために教材を提供し、中国の自然保護区の管理にも新しいモデルを提供できるものであってほしい。

エコツアーを始めるために：白馬雪山の場合

広瀬敏通 小原比呂志 森美文



2011年から2014年まで、日本エコツーリズム分野の専門家が何度も白馬雪山を訪れ、自然体験や地域の関係者との交流を通じて現地の状況を把握した。さらに、保護区職員と住民を対象に研修をも数回行った。三年間の中で、協力してくれた三人の専門家がそれぞれの視点から、保護区の現状を評価し、エコツーリズム的な活動を展開するために、どんな準備が必要かについてアドバイスをしてくれたが、整理すると主に以下の4つのキーワードが見えてくる。

1. 情報提供機能
2. 人材育成
3. 関係者の役割
4. ガイドライン

一、情報提供機能



白馬雪山自然保護区は、インフラ的にはすでにしっかりしていて、自然学校の施設として不足はないが、ただあそこに、ビジターセンター機能、つまり情報機能がない。東竹林寺にある「宣伝教育センター」は、情報センターとしてまだ機能していない。自然学校的な役割を果たすために、体験だけではなく、

情報提供機能も必要。



例えば、東竹林寺は入り口施設として、一般の観光客を対象に、白馬雪山と地域との関係について、つまり、白馬雪山がどのように地域の人にとって素晴らしい存在なのか、白馬雪山がもたらす生態系機能があそこの人たちの暮らしを支えていることをちゃんと紹介する必要がある。例えば、水や緑や食べ物をもたらされているし、白馬雪山を起源とする水流の流れが村の人たちを生かしているわけだから。

一方、キャンプ場は、主に以下の情報を提供できる：

1、保護区管理局の仕組み：保護区管理局がどのような取り組みをやってきたのかなど、取り組みを紹介。

2、地元住民の情報：四つの村の位置づけについて紹介すること。例えば、なぜこんな辺鄙なところに村があるのか、現在どのような環境に対するかかわりをもっているのか、環境を維持して守る側にも貢献しているのか。もしかすると、「こんなところで牛を飼っているなんて、ひどいじゃないか」と思う人がいるかもしれないから。

3、プログラムについての情報紹介：ガイドツアー、チーズやバターを一緒につくるプログラムなど。伝統的な生活をプログラム化することなど、いくつかのプログラムを作り出す必要がある。実際に歩くコースを設定して大テーマと小テーマを決め、エコツアーソースを組み合わせてプログラムを作る。これが実際のコンテンツの骨組みになる。

4、自然情報の紹介：ここはどんな生き物がいて、どういう植物、鳥、虫が見られて、天気は、ここ一週間どうなるかなど、基本的にビジターセンターが求められる自然情報は絶対に必要。定期的に更新される必要もある。

以上の情報を提供するためには、写真解説パネルや、地図、ガイドブック、パンフレット、それから百科事典のようなインプット資料があるといい。

トレッキングツアー、登山ツアーの場合は、目的を達成するという満足感が必

要ですが、スタディツアーやエコツアーの場合これと違い、参加者が主人公としての自覚を持ち、白馬雪山の全体像を把握し理解することがツアーを体験する上で非常に大切です。行動用の良い地図、そして、白馬雪山全体を一目で見られる立体地図が研修所などにあると良い。また標高別植生図、土地利用の分布図、地質図なども理解を深めるためには有効。

「白馬雪山の百科事典」について、白馬雪山の総合調査から、全体をいくつかの大テーマに分け、興味深いエコツアーソースをまとめ、科学的な究明とそれらのストーリー化を行う。

さらにこれをうまく解説するために、「インタープリテーション」を学ぶ研修で、ガイド人材を育てることも必要だろう。

5. サインシステム：キャンプまでの山道は徒歩1時間ほどかかる。初めて訪れた人は、空気が薄いから、ぜいぜい言いながら、みんなそれぞれのペースで歩くと、集団では歩けないから、ばらばらになる。そういうときに、サインがあるといい。また例えば、山火事で焼けてしまった樹木がいっぱい立てたのを見た。



標高が低ければ、腐って倒れるけど、標高が高いから、倒れないで残ってしまう。これは「白骨林」ともいわれていて、標高の高いところの特徴でもある。ああいうようなものも、サインがあれば、ガイドや職員が付いてなくてもわかる。

サインシステムは、自然に配慮した色と形と材質で作られるべきで、けばけばしい色をするものやプラスチックでつくられたものでないものがあるといい。道案内にもなる。また、ルート上で落石が起きたら大変なところ何箇所があったが、日本では、絶対に一言注意が書かれている。それがないと、万が一のときに、保護区の責任になる。

6. 事前説明：車を下りて歩き始めてヤクや牛の糞だらけだったのがわかるので、それが、みんな最初を感じる、ある意味ネガティブな印象も含めて、抱くも



ので、それについての情報を事前に出していくのが大事。「これは、ヤク、牛の放牧が何年間ここで継続的に行われてきたことで、いまご覧になっている景観、下草がきれいに刈り込まれているような景観が維持されています」とか。そういう情報を提供していくと、あ、そうなのかと、納得するだろうと思う。キャンプ場に入って初めてわかるというよりも、歩き始めたときに最初にみんな感じることなので、そういうところに一つおくといい。そうすると、あの一時間を、不快な気持ちで歩くか、一つ理解が深まったという思いがあるのか、かなり違ってくる。

保護区への山道の入口付近は大規模な道路工事がおこなわれている。トンネル採掘の残土や道路の法面の切り土が多量に谷に捨てられたことで植生が破壊されている。これらの植生が回復するには気の遠くなるような時間がかかると思われる。かつて、日本の亜高山帯で行われた同様な道路建設の跡は、50年たった今でも植生が復元していない。これらの個所では豪雨時の二次災害が懸念される。また、工事の材料や廃棄物が多量に投棄されているが、これらの場所は重機の入れぬ箇所であるため人力だけで回収することは極めて困難と思われる。このような工事の残土は、一時期解決できるならば、現状としてツアー参加者に説明し、いいとことだけではなく、問題も環境教育になるので、逆にツアーの内容を深めるものにもなる。

以上のようなことは、事前の説明会やガイドブックによる解釈などで訪問者の理解を得るいいと思う。

二、人材育成

情報提供機能は基礎として整備されたら、次はそれを良く理解・消化し、訪問者にうまく伝える人材を用意すること。

1、どんな人がガイドに？

来訪者には、ガイドが同行することが好ましい。ガイドの随行者は保護区を保全

することに加え、来訪者にとっても自然や文化の解説がえられ、安全管理の上でもメリットがある。したがって、ガイドはインタープリテーションができることに加え、安全管理の知識やファーストエイドに熟知している必要がある。特に、高所のため来訪者の健康状態に配慮できる知識の修得の必要と思われる。

人材育成は、都市にいる人をあそこに連れてきて、ガイドさんをやらせるためのものではなく、あそこに暮らしている人たちを育成したほうが、あそこの強いチベットなまりやチベット人の暮らしぶりなど、そのようなことを背景にしてガイドができる人、というのを想定してやるということはまず一つ。

ガイドは保護区の職員であることが望ましいが、限られた予算の中では人材を確保することは困難な場合もある。したがって、ガイドはボランティアスタッフを導入することも考えられる。かつて日本では、公益法人がボランティアレンジャーを募り、トレーニングを経て国立公園に派遣した事例がある。当時の環境庁からは若干の予算が出ており、それを公園滞在中のボランティアの食費などに充当していた。



ここでは、来訪者からのガイド料の徴収などでまかなうことができると思われる。また、職員とボランティアとが協力して、案内パンフレットや絵地図を有料配布することによって、活動費を捻出していた。

地域住民は荷物運搬や食事提供、あるいは炊事や暖房のための薪の販売などで多少の収入を得られる。また、牧民の中からガイドを養成することも可能と考えられる。

2、ガイド養成

● 理念とミッション

ガイド研修を受ける人は、みんなそれぞれの思いを持っている。ここが大好きとか、白馬雪山に対して、朝夕お祈りするとか。信仰上あるいは好き嫌い上、人々はあそこに暮らしているわけだが、しかし、仕事だから、仕方なく村から派遣されてきているんだよと思っている人もいるかもしれない。本当は町のほうがだいすきだけどみたいに思っている人がいるかもしれない。いろんな思いを持つ

ている人がいるので、いまの伝える技術みないにスキル優先の研修だけでは、ほころびが起きる。何のためにガイドをやる必要があるのか、お金のためなのか？ 思いがなければ、お金が入らない最初の一定期間は「なんだ全然食べていけないじゃん」とやめちゃうかもしれない。志の部分をしっかり統一して高めていく必要で、そのための研修も必要。

- 安全管理

安全管理は自然体験とっても最も重要なことだが、白馬雪山のような高原地帯で活動する場合、一般的なそれに加えて注意しなければならないのは高山病の可能性。したがって、高地適応力テストや高地順化プログラムなどの高山病対策が必要。

もともと標高の高い地域に住む雲南省の人には利用しやすいと思われるが、上海や北京など低地の人や、日本や欧米などの利用者には、この高地順化や対策が可能かどうか白馬雪山利用のカギとなるだろう。

- 伝える技術

ツアーで実際にゲストにあわせて分かりやすく解説する。この際ゲストがどのような環境で暮らしている人かを理解しておくことが必要。地元住民は、都会で暮らしている人たちみたいに、コミュニケーションが上手じゃないし、臨機応変な軽妙なやり取りに長けているわけではない。だから、伝える技術はとても大事。それを学ぶためには、座学より、実習、現場学習のほうが効果的。

また牧畜の体験などについては、ガイドがゲストと接する際の行動規範（ガイドライン）も必要。

- 「白馬雪山の百科事典」



前文で言及した「白馬雪山の百科事典」を全体的に学んで理解し、自然環境についての、例えば、樹木、昆虫、哺乳類などの生き物についての研修は、保護区のスタッフや白馬について詳しい研究者が行うことができる。さらに、それらの

知識を現場で実際に確認し深めることも必要。

白馬雪山でエコツーリズムを推進するために必要なのは、これらを指導できる白馬雪山や三江并流地区に精通したゼネラリストの専門家だと思う。しかしなかなかそういう人材はいないもので、担当を決め、試行ツアーを重ねながら少しずつ積み上げてゆくしかないだろう。

● 自然環境、地域文化への配慮

1). 自然の保護と利用

保護区内は、価値のある自然や文化を残すためにそれらの保全の必要性がある。それと同時に、それらを地域外へ発信する必要がある。保護区内への立ち入りを禁止してしまえば、保護している価値が世の中に伝わらない。閉鎖した区域内で自然が大きく破壊されても、誰もが関心を示さないなら、保護区としての社会的価値がなくなってしまう。

したがって、保護していくことと、利用していくことの両立が必要で、保全という概念が大切である。

2). 持続的な生業

放牧をはじめ、地域民が古くからその自然と調和してきた生業は持続させる必要がある。



そのためには、これまでのやり方や規模をできるだけ維持する必要がある。また、商業的な急激な変化は自然環境に大きな影響をもたらすことを知っておかねばならない。

特に畜産は、生産性を高めるため家畜の放牧数を増やすことが環境破壊に結びつく事が多い。自然破壊は富を増やす

こととは反対に、生業そのものが崩壊する可能性を秘めている。

3). エコツアー

環境が許容する範囲で行われるエコツアーは、地域に適度のお金を落とす。しかし、あくまでも生業に付随した余剰所得として考える必要がある。観光収入

を当て込むと、環境収容力を越えて環境に負荷を与え、現金収入を損なうだけでなく生業をも崩壊させた事例は多い。

エコツアーとは、あくまで生業で生計を立てるものに付随した副業の域を出ないように配慮することが肝要である。

4. 来訪者の総量規制

エコツアー実施にあたって最も大切な前提となるのは、入域人数のコントロールだ。高山帯である脆弱な自然環境の中での自然の保全。加えて来訪者の満足度などを考えて適正な入込者数を設定する必要がある。



需要の圧力が強まると、適正規模を守ることが難しくなるが、白馬雪山では管理体制が明快なので、入域許可権限さえ確立していれば、コントロールは容易と思われる。また公益性重視で予算的な裏付けがあるので、収益性をあまり考えなくてよいのは運営上の利点である。

例えば、1日当たり10人規模で5パーティ。1谷あたりの総数50人程度が妥当と考えられる。また、1パーティはポイント負荷を考慮して最大でも20人以下。解説や注意事項の伝達でもアイコンタクトが取れるようガイド1人当たり10人前後が適正と言われている。

三、関係者の役割

「白馬雪山でエコツーリズムを推進する目的は何か？」

これを十分に検討し、関係者間で共有することはとても重要。白馬雪山の生態系の保護が目的なのか、地域住民の経済的自立が目的なのか、牧畜を中心とする民族の生活文化の維持が目的なのか、金沙江～揚子江～長江流域への水源地保全への啓蒙が目的なのか、国内あるいは省内で自然の大切さを知る人材育成が目的なのか、あるいはそれらの複合目的なのか。

目的に合意できたら、関係者はそれぞれの役割について明確することも必要だろう。ここでは主に保護区、NGO、地域そして行政について分析してみる。

1. 保護区の役割

保護区は地域内のエコツーリズム全体をマネジメントする。

- 白馬雪山自然学校の本拠地であり、施設とフィールドとプログラムを提供し、解説者またはインタープリターを配置する
- 年間を通じた同地区の自然情報、地域人文情報を来訪者に効果的に提供出来るよう、ハンズオン展示や体験型の解説手法を開発する
- フィールドを活かした各種の体験型プログラムを継続的に実施する。

2. NGOの役割

- 保護区の自然学校化に向けて専門的な助言、研修を提供する
- 都市部住民と保護区をつなぐネットワーク的な取り組みも行う



都市部の NGO や市民団体とつながることによって、いろんなメリットが生まれてくる。例えば、都市部から人がくるような状況が生まれる。都市の NGO が持っているノウハウとか、いろんなリソースが使える。雲南省という枠内でもいいし、チベット自

治区内、昆明、成都などの NGO と合同シンポジウムをやるとネットワークができる。

3. 地域の役割

保護区を軸とする 4 つの村には伝統的なチベット族の生業や習俗を貴重な資源と認識して、その保存と公開について協力をする。

- 伝統的な文化・習俗をエコツアーや環境教育プログラムに出来るよう、協力する
 - 住民自身がプログラムの担い手として参加する
- ※政府、保護区からも上記の要請を行い、その実現に努める

4. 政府の役割

政府は保護区が将来に亘って良好な自然環境と文化資源を維持できるように法律や政策面でサポートする役割。

そのための具体的な普及啓発と産業化の取り組みである自然学校活動に以下の点について全面的に協力する。

- 小中高校生徒の課外学習として保護区自然学校を活用する
- 地域住民が保護区自然学校に運営に参画できるようにする
- 都市住民の自然環境保護の意識啓発に効果がある措置を行う
- 保護区自然学校の諸活動を支える予算を措置する

上記、可能な範囲で条例、法律などに制定して、措置の裏づけを行う。

四、ガイドライン

エコツアーを実施するために、もっとも重要なのは、エコツーリズムの真髓を理解し、その精神に沿った活動すること。ここでは、まず日本での定義を見てみよう。

<エコツーリズムの定義>

エコツアーとは「参加者が、環境、自然(景観)、野生動植物、生態系を理解し、鑑賞し、加えてそれらに関する倫理観を向上させるべく、自然地域の中において、環境、自然(景観)、野生動植物、生態系を損なうことなく、適切な人数の参加によるツアー形式」

エコツーリズムとは、このような形態の「エコツアー」が繰り返し行われることにより、地域の自然と文化の保護、地域経済に貢献する社会的しくみが作られることであり、これは単に旅行者の自覚や旅行業者の工夫だけで達成されるものではない。ツアーリスト、企画者、ガイド、受け入れ側などの協力が必要である。(1994/8、(財)日本自然保護協会)

以上の定義を参考に、森美文さんが長年エコツーリズムの実践経験と白馬雪山における調査結果に基づいて、次のページのガイドラインを提案してくれた。しかしそれはあくまでもたたき台として作成されたもので、本当のガイドブック、そしてガイドラインは、やはり白馬雪山のことをもっとも理解していて、愛している白馬で暮らしそして働いている人たちがつくるものだろう。それはすべての地域において言っていると思うが。



白馬雪山エコツーリズム・ガイドライン

一、エコツアーリストのガイドライン

1. 白馬雪山の自然環境に悪影響を与えない
2. 白馬雪山の文化を尊重する
3. 事前に白馬雪山の地域について学習するよう努める
4. 旅の体験を通して環境問題を考える
5. 自然とのふれあいを尊重し、自然とともに生きるライフスタイルを身につける

二、旅行企画者および、ツアーコンダクターのガイドライン

1. エコツーリズムの主旨を十分に理解する
2. 「自然に親しむ旅行」から「自然保護につながる旅行」にしてゆく目的意識を持つ
3. 白馬雪山保護区の受け入れ体制を熟知する
4. 企画段階で白馬雪山に詳しい研究者や自然保護団体の意見を取り入れる
5. 旅行グループの規模は20名以下を厳守する
6. 参加者に事前のオリエンテーションを実施する
7. 白馬雪山の自然と文化を熟知した地元のガイドを手配する（もしくは保護区職員の同行）
8. 地元の人々とのコミュニケーションをはかる
9. 参加者や地元からのツアーの評価をフィードバックする

三、宿泊施設のガイドライン

1. 地域の自然、文化を表現するのにふさわしい立地条件を選ぶ
2. 保護区の自然、文化に悪影響を与えない規模とする
3. 地域の人々が中心になって、管理、運営、経営する
4. 施設、建物そのものが環境、エネルギーに配慮する
5. 宿泊者に過度な快適性を提供しない
6. 白馬雪山の自然文化に関するガイド、展示、施設、ガイドブックを紹介する
7. 地域の経済・文化のネットワークに入る
8. 地元産のみやげを推奨し、地域の物産を中心とした食事を提供する

四、保護区を管理するためのガイドライン

1. 地域の研究、保護、教育施設との情報交流を行う
2. 保護区の収容力を科学的に設定し、自ら遵守するとともに、関係者にそれを守らせる
3. 保護区の最大入れ込み数を設定し、過剰な利用にならないようコントロールする（当面は、一つの谷に5パーティ/日以下を厳守する）
4. 自然への接触が少なくインパクトが大きい利用を排除し、自然への接触が大きくインパクトが小さい利用を促進する（環境教育を実践する）
5. 地元以外の資本の移入は原則として禁止する

（参考資料：NACS-J エコツーリズム・ガイドライン、1994/8、（財）日本自然保護協会）

白馬振り返る

王国彗 楽与永続スタジオ

2011年、日中市民社会ネットワークの朱さんと屋久島の友人たちを連れて白馬保護区を訪れた際、マイカーでやってきた観光客が国道で通り過ぎた場所を指さしながら、山のどの部分がいわゆる「白馬が振り返る」と呼ばれているかについて合っているのを見て、私たちも四方を見渡したのだが、保護区局長の肖林が笑い出してしまった。「あなたが思うところがそこだろうか？」

その通り、まだ山にも入っていないのに、もうすでに山について語り始めたとは。私たちは体験や教育を語る時にも、「山の外で山を語る」のは最も避けなければならないことだろう。思えば長い時が経ったものだ。私から見れば、保護区外の道路で人の往来が盛んになっても、工事で道路が拡幅しても、白馬は何も変化していないかのように思う。肖林は、局長になっても、レンジャーをしていた頃と同じように今も慎重で、見当違いに「大きく強くなろう」とするなどは永遠に無縁だ。参加者が彼に「保護区の間で経費の競争をしていると聞きました。もし、猿の保護がとてもうまくいって、絶滅危惧種でなくなったら、あなたは失業するじゃないですか？」と尋ねたことがある。すると彼はこう答えた。「もしそれで失業するなら本望ですよ」。



2007年に保護区を初めて訪れたときから、去年楽続遺産体験ツアー（Live Heritage Tour）の参加者を白馬に案内したときまで、私と白馬のご縁は丸7年にもなった。白馬を訪れる度に、万難辛苦を乗り越えてようやく実現したわずかな改善点（例えば電気が通ったこと）と、それ以上の苦労と努力でやっと維持できた「不変」を

目にしては、胸がいっぱいになり自然と鼻の奥がツンとする。なぜなら、皆がどんなに苦労して栈道のための丸太を一本一本運んでは組み立てていたか、水道管を敷設するために部品をラバに背負わせて何度も運んでいたかを知っているからだ。しかし、それよりも喜ばしいことは、やはり志を同じくする者たちがそれぞれの道で成長しながらも、変わらず共通の物を守っていることだろう。星川

氏や朱さんは、屋久島や白馬でのエコツーリズムの交流テーマを、さらに幅広いチャンネルを持つ東アジア地球市民村に広げてくれた。提布や茨里、龍華たちは獣医やレンジャーから、基地の水道電気技師や接客専門員に成長した。静若は今では自然学校でインタープリターになり、美しい植物絵本をしたためるようになった。不精者の私も一念発起。記者を辞職しボランティア活動をしたり、海外留学したり、いまは草の根の世界遺産保護者として活動している。身の程知らずにも、社会的企業の方法を取り入れ、地域の仲間たちと一緒に「遺産共生」の実行可能性を追求している。場所は違えども、いつも同じく共生について考えている。これこそが白馬や屋久島という「世界遺産」が私たちに与えてくれたもので、もっとも感激に値する「生きた遺産」であろう。

感激の気持ちに終わりはないが、やはり少し残念なことも話しておこう。速いことがいいとは限らないが、遅ければいいというものでもない。振り返るのは簡単ではない。

中国国内の国家級自然保護区でのエコツーリズムの創業の先鞭として、白馬は早くから取り組んでいただけでなく、地域の協力者の意識も高く、行動も効果的な上、宿泊施設も当時では一流だった。しかし、これまでずっと受け入れ量はバラバラだった。口コミやメディアへの露出も限られた範囲で、知る人ぞ知るというスタンスも悪くはないが、安定的で性格がはっきりとするエコツーリズム（あるいは自然教育）の商品やブランド、そして運営方法はまったく形成されていない。

発足当時の、自然遺産の保護管理形式を革新したパワーは継続されていないし、社会に対するPRという面で発揮すべき影響力も発揮されていない。これはもう残念と言わざるを得ない。資源から商品へ、さらに運営管理に至るまで、合理的にそれらの間をつないで回していくものがないのだ。ならば、それは一体どこにあるのか？これは私がずっと考え続けている課題である。ここでは、私の視点から、いままで何度も討論されているのに解決方法が見つからない問題を提起することで、白馬に行ったことがあり、白馬が大好きで、白馬のために何かしたいと思っている人々が、今後討論や行動を展開していく上で、何らかの参考となるのを期待しているのだと思う。

1. 最初の一步は早く、意識も先を行くものだったが、ソフトウェア面については継続力が足りない。

先ほど取り上げた宿泊施設については、曲宗貢（生態定点観測所）やトレール、価格やプログラムを紹介するパンフレットなど、そのほとんどが2006年にはすでにパイロット版が作られていた。ここ数年、保護区は徐々に水道・電気系統の供給設備を整えており、自力でやっている姿は尊敬に値する。ただ、ソフトウェア面での整備については相対的に能力不足だ。例えば、外に向けた関連ツアーの情報提供は、実用性およびPR面での両方で、あまり改善されていない。エコツアーリズムのHPは、本質を伝える内容になっていない。何よりも先に用意すべき情報提供機能（基本的なエコツアーリズムのガイドブックや、花や鳥の観察ハンドブックといった細分化された案内資料など）もいまだにできていない。

2. 経験が生かされないまま劣化し、改善方法を実行に移せない。



2011年、ウィンロック農業開発センターの外部エコツアーリズムのトレーナーとして、私は当時の保護区エコツアーリズムの発展状況について調査研究し、基本評価と資源要素の分析を行った。私たちは地域と一緒に討論し、初歩のエコツアーリズム商品設計（通常コースと特別コースの設計など）と1～3年に渡る

エコツアーリズムブランド開発計画を完成した。開発計画には、解説システムの構築や人材育成、ツアー客の管理システム、多機能な宿泊施設、ホームページ作成、土産物や記念品を開発して地域の財務を支援するといった事業案があり、対応するスケジュール表も作られた。これらの計画は、私と白馬管理局、地域の代表者、ウィンロックのプロジェクトチームが一緒になって、地域の需要と現有する資源を考慮しながら相談し作り上げた実行可能な戦略だった。残念なのは、この三者が同意した実行可能な戦略が、4年経っても形にならなかったことだ。主な原因は、経費が投入されなかったこと、専属スタッフがつかなかったことの2点だ。さらに残念なことに、似たような交流活動や調査研究成果が挙げられているのに、効果的な共有やPRがされておらず、相乗効果を生かすチャンスを逃した。

3. 特殊な体験（教育）の商品化および市場化の過程における資金不足と専門家不足。

いつも商品化や市場化において失敗すると、地域が持っている豊富な遺産知識やマンパワーを、高品質な社会教育商品やサービスに有効に転化することは

できないし、保護区がエコツーリズム（あるいは自然学校）をやってみようという初志も達成しないだろう。

このような専門化の道では、適切な団体とのコラボレーションや外部人材の採用は、商品を共同開発できるだけでなく、地域の人材養成にも有利だ。例えば、先ほど挙げたエコツーリズムに関するハンドブックの作成だ。保護区には豊富な素材と実践経験があるが、残念ながら適切な編集者がいない。外部のプロの編集者や出版社に頼みたいと思っても、経費の申請は難しいだろう。このような投資の不足分は、従来型の政府からの割当金や基金会からの助成金にも頼れない。開発者は商品の市場や社会収益から支援を得る他無く、いわば「自分の血液を輸血用に提供する」というようなものだ。成熟した商品ですら完成形ではない以上、市場から利益を得ることはかなわず、いつまで経ってもものびきならない状況が続くことになる。

4. 自然教育界のコラボレーションや専門レベルの向上、市場の開拓は、期待できる。

ここ7～8年、中国大陸における自然教育も無から有になってきて、勢いよく発展する上昇期に入っている。白馬地域も自然学校の交流と育成を図る団体の中で最古参の一つだが、まだ自身の自然学校を作るには至っておらず、専門的な自然教育団体と合同で建設することも実現していない。では、白馬がエコツーリズム、特に自然教育を発展させる上で、ボトルネックとなっているのはいったい何だろうか？そこに内在する関係要因はすべて分析に値する。

他方では、2014年に参加した白馬視察の際に行われた中日自然教育界の交流で、日本側が示した観点の多くに大変刺激を受けた。例えば、「合同開発する目的地の環境について、その成熟状況をどう評価するか」という問題について、中国側の人間は白馬社区の発展状況はまだ十分成熟しているとは言えず、受け入れ側の意識や条件（食事や宿泊施設など）も限られていて、育成や活動を展開するにはまだ不適合だと考えていた。ところが日本側の専門家は、ぜひ人を連れてエコツアーをやってみたいと言った。その理由は、「その地域の状況に合わせて人を案内することであり、それに、もしここが『成熟して』誰でも来られるようになったら、ここはもう危ないだろうから」。

この一件はとても興味深く、交流している間はしょっちゅう耳にした話だ。個人的な感想だが、広瀬氏や小原氏、森氏など、白馬に視察と交流で訪れた日本のエコツーリズム界の専門家の貢献は、専門分野での提案だけに留まらない。観察

の視点や理解の違いのほうが、反省やさらに進めていく価値がある。このような得難い経験の交流が、今後の私たちの作業において、より有効な分かち合いや応用につながることを期待する。

5. 持続可能な行動規範を導入する。

白馬雪山自然保護区の総合的な生態価値を尊重し理解した上で維持し、その生態保護事業を支援することは、この保護区をターゲットとして計画している体験活動の基本前提である。この前提の下で、保護区と協力者側と一緒に展開している活動をどのような面から切り込み、どこに重きを置き、どのように分類し命名しようとも、それらの活動は持続可能性の原則に符合すべきであり、またそうでなければならない。白馬は管理者として、確実に実行できる行動標準の規範を形成し、戦略評価やツアー客の管理をしなければならない。また協力者であり、組織を形作る者でもあり、訪問客ともなる私たちは、共に白馬を助け、それぞれの専門的な経験を起点に、一緒に貢献や提案をし、身をもって範を示す責任がある。

まとめると、私の理解するところでは、白馬のエコツーリズムは、中国自然遺産管理体制が転換するという大きな背景の下、特に重視するに値するもので、地域と共に管理し共に構築する保護区エコツーリズムにおける革新的な事案である。どのようにして当初のモデルを改革し、相応の商品や管理体制、運営方法、ブランド構築とその維持を順調に実現していくのか、また市場と社会の両方から収益を上げることで、保護区と社区の持続可能な発展を活性化し恩返ししていくのか、それには、ひとえに白馬内外の同業者の辛抱強さと頑張りとの協力が不可欠だ。

今秋、楽与永續スタジオはまた白馬に入る。今回は村落の伝統手工芸の調査・研究だが、伝統手工芸のエコツーリズム記念品を社区が設計・開発する上での支援が目的で、文化を継承し、収益を上げることを目指す。私たちの力は小さく、短期間で明らかな経済収益を上げることはないと思われるが、心を尽くした作業の成果が村に受け入れられ、共同財産として大切にされると嬉しい。私個人としては、一民間人の遺産保護員としてずっとやっていき、草の根の自由を維持しながら役目を果たし、“わが故郷わが土”の滋養を得たいと思う。この単純な勇気と幸福感は、あの日、白馬の山道に分け入って学んだものというべきだろう。いつ振り返っても、白馬は、いつもそこにある。

終わりに

このガイドブックにまとめられたのは、外からの私たちから地域の方たちへの提案だが、しかし当然と言っていいのは、私たちのほうがたくさん貴重なものを彼らからいただきました。自然と共生する地域文化は自然保護の土台となり、エコツアーの推進に対していつも「着実にしっかりと」「量より質を」との原則を貫いてきた保護区の姿勢があったからこそ、白馬雪山はいまだに観光型開発に飲み込まれていません。

今年3月に、「第一回東アジア地球市民村」が上海で開催されました。屋久島・雲南環境交流事業の延長線上にあるこのプロジェクトは、「自然共生」をキーワードに国境を超える共働を目指すもので、今回のテーマ「スロー、スモール、シンプル：持続可能な社会とアジアの英知」の3Sは、まさに白馬雪山の「哲学」に当てはまるものです。

2011年震災後に始まったこのプロジェクトは、社団法人アクトビヨンドトラストを始め、多方面から支援と指導を受けてきました。改めて、すべての関係者にご感謝を申し上げます。誠にありがとうございました！

白馬雪山とのご縁で生まれたこの提案書は、ぜひエコツアーや自然学校の従事者、自然保護区・国立公園の管理者、行政、さらに観光業者に読んでいただきたい。人と自然との共生する社会を実現するために、少しでも貢献できたら幸いです。

日中市民社会ネットワーク

2015年3月



執筆者



李静若 雲南在地自然教育センター



広瀬敏通 日本エコツーリズムセンター



小原比呂志 屋久島野外活動総合センター



森美文 森環境教育事務所



王国慧 楽与永続スタジオ

特別感謝



肖林 白馬雪山国家自然保護区



提布 白馬雪山国家自然保護区

協力団体

白馬雪山国家自然保護区

助成

一般社団法人アクトビヨンドトラスト

編集

日中市民社会ネットワーク

お問い合わせ

info@csnet.asia



東アジア環境交流プロジェクト